

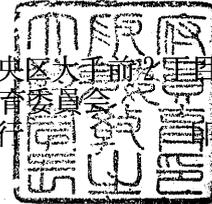
(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪市中央区大手前2-1-1  
管理機関名 大阪府教育委員会  
代表者名 酒井 隆行



平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 大阪府立北野高等学校

学校長名 恩知 忠司

3 研究開発名

「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」

4 研究開発概要

大阪府立北野高等学校における「全地球的視野と歴史的教養に裏付けられた、豊かな人間性と知識をもち、自国の問題と世界の問題を互いに関係づけて把握し、理想の実現に向けて自ら行動をおこすことができるグローバルリーダーを育成するための教育プログラム研究開発」

以下のような研究内容でプログラムを実施した。

- ・東南アジアの現状と東南アジアの国づくりを知るための研究  
(課題研究・アジア出身の講師による基礎力養成講座)
- ・フィールドワーク法等、研究手法の習得に関する研究 (ハワイ及び東南アジアでの研修)
- ・論理的説明能力を養成するための統計的手法の習得に関する研究  
(学校設定科目「国際情報」における統計的手法習得のための授業の実施)
- ・専門家や留学生を含むさまざまな人々との交流と研究成果の検証評価に関する研究  
(取組と生徒の意識変容の相関関係を見るアンケートの実施)
- ・「超高校生レベル」英語によるコミュニケーション力を養成する研究  
(学内留学、英語上級セミナー、即興型英語ディベート)
- ・グローバルなプレゼンテーション力を養成する研究  
(「国際情報」におけるプレゼンテーションスキルおよびディベートスキルの習得に関する授業及び発表)

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

| 業務項目      | 実施日程 |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |
|-----------|------|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
|           | 4    | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
| ①英語教育支援   | →    |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |
| ②海外研修支援   |      |   |   | → |   |   |    |    |    |   |   |   |
| ③生徒の伸長の検証 | →    |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |
| ④運営指導委員会  |      |   |   |   |   |   | ○  |    |    |   |   | ○ |
| ⑤成果の還元普及  | →    |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |
| ⑥指導助言     | →    |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |

(2) 実績の説明

①英語教育支援

ネイティブ教員を複数名配置し、英語教育を支援

②海外研修支援

ミッション大学やシリコンバレーでの研修(府教育委員会主催)を実施

実施時期：7月28日(土)～8月5日(日)

目的：豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つ、知識の重要性が一層増すグローバル社会をリードする人材を育成するため、グローバルリーダーズハイスクール(GLHS)の代表生徒を海外の大学等へ派遣し、教育・文化交流活動等を通じて、国際社会に貢献できる真のリーダーとしての資質の向上と国際性の涵養を図る。

③連携大学による生徒の伸長の検証

関西学院大学による「SGH 生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」の調査研究を実施。相対的評価の検証のみでなく、形成的評価を重視し、SGH 生徒の志向性、価値観、知識、遂行力等の測定評価を試みている。

④運営指導委員会

2回(10/27、3/2)実施。第1回目は成果中間発表会と同日実施とし、生徒への指導助言を含め、指導の在り方について協議を行った。第2回目は成果発表会をうけて、次年度への方針と指導体制、支援の在り方について協議を行った。

運営指導委員： 山本 雅弘 株式会社 毎日放送 相談役最高顧問  
 野村 正朗 学校法人 帝塚山学院 理事長  
 織田 公文 日本・ベトナム経済交流センター専務理事兼事務局長  
 中垣 芳隆 大阪女学院大学 教授  
 楠野 宣孝 樟蔭中学校・高等学校 校長  
 福本 美紀 大阪府教育センター 高等学校教育推進室指導主事  
 堀内 貴臣 大阪府教育センター 高等学校教育推進室指導主事

第1回運営指導委員会 協議内容 於：校長室

i 中間発表会に出席された委員からいただいた助言

- ・毎年参加しているが、初期に比べて発表力が上がった。テーマに対するアプローチについては物足りなさを感じる。これからがんばってほしい。

- ・北野の全てのクラスで課題研究をやっていることは特筆できる。大人から見ると答えが分かかってしまいそうなテーマを選んでいる。高校生らしい身近な疑問点を大切に。ネットに頼らずスカイプなどを利用して「生の」情報を集めてほしい。
  - ・昨年度も発表を見たが、今年は発表の工夫が見られた。ポイントは「まず疑ってデータを見ているか、自分たちの発表が整合性を持っているか、オーディエンスに対して何を伝えたいのか、自分たちが楽しんでやっているか等」である。
- ii 中間発表用のルーブリックによる各グループの得点集計結果をもとに運営指導委員会の場で協議した結果、以下の4グループをそれぞれ外部で行われる大会や発表会に派遣することに決定した。
- ①SGH 高校生フォーラム (12月15日・東京) ポスター発表、英語で説明
    - 英語系4 (東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策)
  - ②SGH 甲子園 (31年3月23日・関西学院大学)
    - 口頭発表またはポスター発表 英語または日本語
    - 社会系4 (“大国の脅威に屈しない” ラオス 発展のために)
  - ③大阪教育大学附属高校平野校舎の発表会 (31年1月12日) 口頭発表 日本語
    - 社会系2 (インドネシアで五輪開催を)
  - ④GLHS 10校合同発表会 (31年2月9日・大阪大学豊中キャンパス) 口頭発表 日本語
    - 理系3 (絵画と天文学)

第2回運営指導委員会 協議内容 於：校長室

- ・成果の普及が問われる。近隣の中学校や高校へも広く案内を。
- ・指導として、まずは方法論を年度当初にしっかりと伝えることで、内容も深掘りされる。
- ・できるだけ現地の声、生の声を数多く聴き、内容の質を高める。

⑤成果の還元普及

SGH 指定校と同様に課題研究に取り組む高校や、グローバル人材の育成や海外進学に関心の高い高校を中心に、SGHに係る活動状況や情報を発信した。また、2/4(日)(場所：大阪大学会館)府教育委員会が主催するグローバルリーダーズハイスクール(GLHS)合同発表会でSGHの研究成果を生徒が発表。発表に対しては評価に用いるルーブリックを府教育委員会が作成し、課題研究の質の向上を図り、その成果の普及還元を努めた。

⑥指導助言

担当課の複数の指導主事が、授業や研究実践への関わり、また次年度の計画の作成、報告書作成など、指導助言を通年にわたって行った。

## 6 研究開発の実績

### (1) 実施日程

| 業務項目                 | 実施期間（平成30年4月2日～平成31年3月29日） |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |
|----------------------|----------------------------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
|                      | 4月                         | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| ①教科・科目「課題研究」の授業・自主探究 | ○                          | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○  | ○  |
| ②大学・企業との連携・探究型講演・講義  | ○                          | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○  | ○  |
| ③研究発表会               |                            |    |    |    |    |    | ○   |     |     | ○  | ○  | ○  |
| ④海外フィールドワーク          |                            |    |    | ○  |    |    |     |     |     |    |    |    |
| ⑤運営指導委員会開催           |                            |    |    |    |    |    | ○   |     |     |    |    | ○  |
| ⑥成果の報告・広報活動          | ○                          | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   | ○   | ○  | ○  | ○  |
| ⑦事業評価の実施期間           |                            |    |    |    |    |    |     |     | ○   |    | ○  |    |
| ⑧報告書作成               |                            |    |    |    |    |    |     |     |     |    | ○  | ○  |

### (2) 実績の説明

平成28年度の厳しい中間評価の結果を受け、昨年度に引き続き本年度においても以下の課題1～4を設定し学校の総力を挙げて取り組んだ。

|     |  |
|-----|--|
| 課題1 | 事業全体の枠組を分かりやすく示し、各取組の概要、意義とそれら相互の関連を明らかにすること。      |
| 課題2 | 評価の枠組を明示し、その上で、アンケート調査や生徒の振り返りを有効に活用して検証すること。      |
| 課題3 | 各取組においては、「何をしたか」、そして、「その結果どうなったか」を丁寧に記述しておくこと。     |
| 課題4 | 【まとめ・表現】のプロセスを充実させるため、生徒が発表する機会、第三者に評価される機会を増やすこと。 |

具体的な目標としては、研究としての質の向上と、英語による即興的なコミュニケーション力、情報発信力の充実である。アジアという難しいテーマを扱う中で、生徒は東南アジア＝貧困といった固定観念、上から目線をなかなか拭えない。それを克服するための基礎知識、歴史的背景、データ、論理的思考力の大切さに気付かせ、研究の質を向上させたい。また、発表のために英語の原稿を準備し、プレゼンテーションをするが、質疑応答になった途端に思考停止してしまう。この悔しさをコミュニケーション力の充実につなげたい。上記の観点から、今年度は英語による即興型ディベートの取組を拡充させた。

#### ①課題研究、②大学・企業との連携・探究型講演・講義、③研究発表会・SGH校との交流・広報活動

＊月5限：社会系19名、英語系9名、理科系13名、

木5限：社会系19名、英語系10名、理科系14名

#### I. アジア探究（社会系）

4月～5月 東南アジア諸国に関する調べ学習、テーマ設定・グループ編成

4/21（土）京都大学東南アジア地域研究所教授 岡本正明氏による講演（全グループ共通）

6月上旬～自主探究

月曜班 対象国：ベトナム テーマ：観光（7名）

対象国：インドネシア テーマ：オリンピック（6名）

対象国：ラオス テーマ：鉄道（7名）

木曜班 対象国：東南アジア全般 テーマ：教育（6名）

対象国：マレーシア                      テーマ：民族間の格差（6名）  
対象国：シンガポール                    テーマ：IR・統合型リゾート（7名）

8月～10月 ワークショップ

- ・東南アジア情報に関する助言（月・木各1回）
- ・東南アジアの情報および中間発表に向けて内容・論点等に関する助言（月・木各1回）

1/12（土）SGH 課題研究発表会（大教大附属高校平野校舎）へ参加（月・インドネシアチーム）

2月上旬～中旬 論文化作業 論文集は3月下旬刊行予定

3/23（土） 月・ラオスチームはSGH 甲子園に参加の予定である。

## II. アジア探究（英語系）

英語系単独で関西学院大学社会学部陳立行教授による講義・ワークショップを計4回実施した。その後、テーマ別にグループ分けを行い、自主探究を行った。

- ①ミャンマーの教育改革。②東ティモールでの観光客誘致を中心にした開発。
- ③イスラーム文化と日本文化との比較研究。④東南アジアに学ぶ眠気対策。

11月～ 大阪大学大学院に留学しているアジア出身の留学生に指導助言者として10回来校

12/15（土）東京国際フォーラムにおけるSGH 全国高校生フォーラムに参加（英語系④グループ）

## III. アジア探究（理科系）

### 【月曜班】

- ①「橋の科学～架設計画とパスタブリッジ」建築工学、構造力学、防災学などの観点から、橋梁架設について多角的に研究し、東南アジアへの貢献の可能性を探る。日本やアジア諸国は自然災害が多く、協力して防災への取組が進められている。この講座では橋の種類や基本構造を学び、東南アジアを対象地域として橋梁架設のシミュレーションを行う。さらに、身近な材料であるパスタを用いて橋の模型を作成し、強度に関する実験と考察を行う。
- ②「快適な建築と環境に関する考察」快適な建築の条件を探究し、快適さそのものを考察した。模型を作成し、温度や日照時間に関し測定実験した。本校校舎設計時の条件と利用者の要望の調査を行い、新たなデザインと可能性の提案を作成した。

### 【木曜班】「自然科学と論理的思考法」

自然科学と芸術の両方に関わる2種類の事象を探究し、論理的思考力を身につける。

- ①「才能の考察～天才時空論」才能を発揮し、過去に功績を残した人物を多数輩出した時代と地域についての検証と考察を行う。過去の事実を検証すると、洋の東西を問わず、革新的なアイデアの誕生は特定の時間と空間に集中する。その理由を探究し、人々が能力を発揮しやすい環境や条件を考察する。身近な地域の未来へ貢献の可能性を探る。
- ②絵画と天文学（絵画を天文学の観点で検証する）（信川久実子先生担当）  
絵画に登場する天体の描写が正確なのかどうか、日時・場所・方角などの情報から、天文学（地学）の知識を使って検証する。

なお、本校における以下の校内発表会は社会系、英語系、理系とも共通である。

9/15（土）文理学科課題研究中間発表会（SGH 関連講座の生徒が司会・進行係を担当）

10/27（土）SGH 課題研究中間発表会（六稜ホール）

2/2（土）131 期課題研究最終発表会（系列ごとで異なる会場）

\*プレゼンテーション形式の発表、SGH 英語系、社会系講座の発表は英語使用

### ③海外フィールドワーク

東南アジア研修（7/22～28）、ハワイ研修（7/22～29）を実施した。参加した生徒数は東南アジア 43 名、ハワイ 45 名であった。

### ④課題研究基礎講座「学内留学」

全4回（10/6, 12/8, 1/12, 1/19）の英語イマージョンプログラム。大学の教養課程をイメージした講座で、土曜日を利用して、専門知識を終日オールイングリッシュで学び、英語運用能力を鍛える取組。「教育学」、「ビジネス学」、「心理学」、「天文学」、「環境学」の5講座を開講、参加者は合計100名となった。最終回では、各講座から1グループが選出され、プレゼンテーションを多目的ホールでおこなった。全員に修了証書を授与した。

また、11/16（金）には、特別講義「EUがあなたの学校にやってくる」を開催した。

### ⑤課題研究基礎講座 学校設定科目「国際情報」

「国際情報」では「情報機器を操作して外国語での情報を受信し、また、外国語でのコミュニケーション力を高めて、情報を外国語で表現し、情報機器で情報を効果的に伝える知識や技能を習得させる」ことを目標にしている。

国際情報の時間は「情報」の部分と「研究基礎」の部分の2本立てで授業が構成されており、2年次に全生徒が課題研究を行う際の研究基礎としての位置付けが1年次の「国際情報」の役割である。そのために国際情報の時間では討議する力を付けることや、プレゼンテーション力を高めることに力を入れている。「情報」の部分は情報化社会のモラルやマナーを学び、情報機器の操作や表計算ソフトやマルチメディアを用いた表現やプレゼンテーションについて学習し、情報化社会の光と影、プログラミングの基礎としてのアルゴリズムや統計やデータサイエンスの基礎を学び情報技術を身に付けた。「研究基礎」の部分では教科横断的な取組を行い、文科と理科の両面からのアプローチで課題研究の基礎の部分を学んだ。今年度における「研究基礎」の実施形態は「情報科と英語科のチームティーチング」と「情報科と理科のチームティーチング」であり、これらを半期交代で行った。

### ⑥評価の実施

質問紙調査と授業時の参与観察（エスノグラフィ）、インタビューを併用して、取組の前後の生徒の変容を調べた。詳細は次項参照。

### ⑦報告書の作成

本年度の取組の総決算として、資料編も含めて5章から成る報告書を作成中である。何をしたか（アウトプット）、どうなったか（アウトカム）に特に焦点を当てて編集している。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

### (1) 取組の検証・評価方法について

#### ①関西学院大学によるアンケート調査の活用

関西学院大学による「SGH 生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」の調査研究では、文理学科2年生の1年次と2年次の意識変化に焦点を当てた。SGH 対象の生徒（SGH 群）

は84名で、2年生全体を対照群とした。選択肢による質問15項目の回答を「ものすごくそう思う(6点)」から「まったく思わない(1点)」まで6点満点で数値化した。さらに、海外フィールドワークや学内留学に参加した生徒を抽出し、延べ21グループに分けて比較した。

SGH群全体・対照群全体も含めて全体345項目のうち、1年次から2年次にかけて数値が上昇した項目は123であった。上昇したグループが最も多かった設問は「Q10(日本以外の)先進国の人たちと個人的に交流したい」(22グループ)であり、次に多かった設問は「Q6海外支援活動に参加したい」(13グループ)であった。

また、SGH群84名と2年生全体(2年次のサンプル数346)の数値を比較したところ、総数30のうち28項目においてSGH群が上回っていた。最も大きな差がついた項目は「Q7海外で、いろいろなことにチャレンジしたい」で、1.246ポイントであった。詳細データは報告集を参照されたい。

## ②2年課題研究SGH関連講座受講生を対象としたアンケート

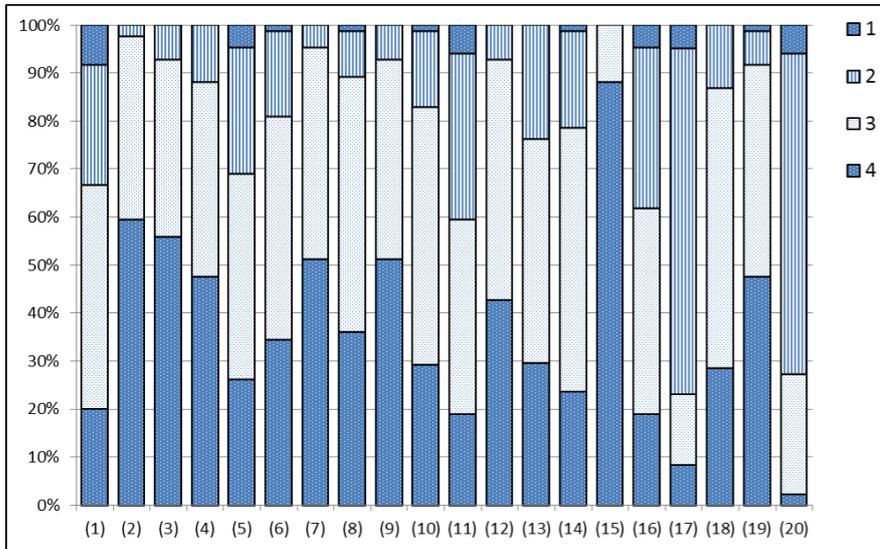
### i 選択肢による回答項目についての検証

課題研究SGH関連講座を受講している生徒84名を対象に、年度初めアンケートを5月上旬に行い、さらに最終発表会後の2月上旬に同じ質問項目で事後アンケートを実施した。質問項目は以下の通りである。回答は、4(そう思う)、3(ややそう思う)、2(あまり思わない)、1(まったく思わない)の4件法とした。

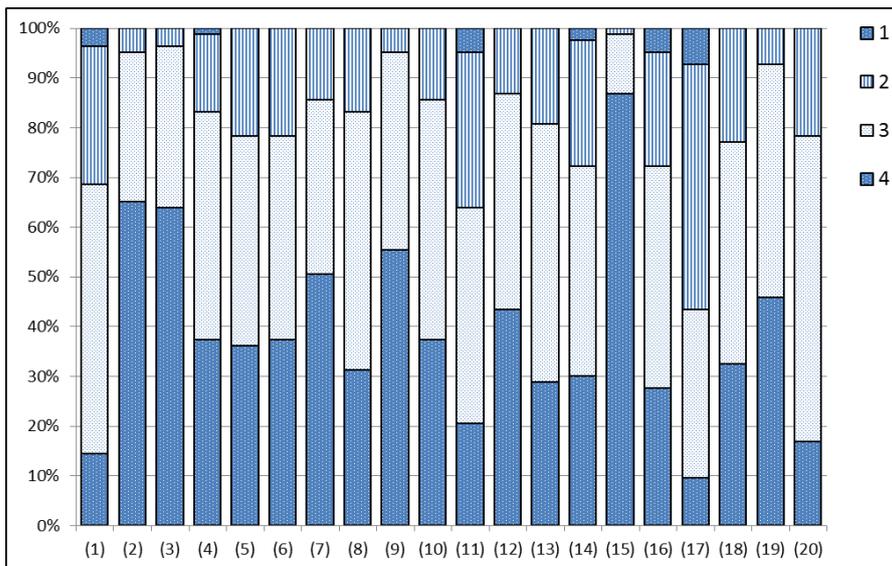
- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

84名による回答の分布は以下ようになった。

年度初め



事後



年度初めと事後における4件法の回答を数値化して平均をとり、比較したものが次の表である。

|      |      |       |      |       |       |      |       |       |      |      |
|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|-------|------|------|
|      | (1)  | (2)   | (3)  | (4)   | (5)   | (6)  | (7)   | (8)   | (9)  | (10) |
| 年度初め | 2.79 | 3.57  | 3.49 | 3.36  | 2.90  | 3.14 | 3.46  | 3.24  | 3.44 | 3.11 |
| 事後   | 2.80 | 3.60  | 3.60 | 3.19  | 3.14  | 3.16 | 3.36  | 3.14  | 3.51 | 3.23 |
| 差    | 0.01 | 0.03  | 0.11 | -0.17 | 0.24  | 0.02 | -0.10 | -0.10 | 0.07 | 0.12 |
|      | (11) | (12)  | (13) | (14)  | (15)  | (16) | (17)  | (18)  | (19) | (20) |
| 年度初め | 2.73 | 3.36  | 3.06 | 3.01  | 3.88  | 2.76 | 2.27  | 3.15  | 3.38 | 2.24 |
| 事後   | 2.80 | 3.30  | 3.10 | 3.00  | 3.86  | 2.95 | 2.46  | 3.10  | 3.39 | 2.95 |
| 差    | 0.07 | -0.06 | 0.04 | -0.01 | -0.02 | 0.19 | 0.19  | -0.05 | 0.01 | 0.71 |

肯定的評価の回答について、伸びが最も著しいのは(20)、次は(5)であった。

評価が難しいところであるが、①の関西学院大学によるアンケート調査結果と突き合わせてみると、現2年生(132期生)は、もともと意識の高い生徒がSGH関連講座を選択した傾向があるとみることができる。

その中でさらに指導助言者である大学の教員や企業経営者からのアドバイスを受け入れ、課題を発見し、分析する力を伸ばすことができたと考えられる。

## ii 自由記述欄の回答に見る生徒の変容

年度初めアンケートでは、自由記述欄に「課題研究に取り組む上であなたが課題だと思っていることについて、自由に記してください」という問いを設定した。また、事後アンケートの自由記述欄には、「課題研究に取り組んだことを通じてあなた自身が身につけたことは何ですか？以下の欄に自由に記してください」という問いを設けた。年度初めと事後とで、同じ生徒による記述からその生徒の変容が顕著に見られた例を紹介する（下線は報告執筆者による）。

〈社会系〉年度初め

生徒 a 経済成長などとその国の人々の暮らしの関係性を調べてみたい（経済、政治と身近なことの関係）。

生徒 b 現地には事実上フィールドワーク等に行けず専門家や文献、時にはインターネットに頼るしかない以上どこまで調査対象国を深くまで追求できるのか（ということ）。

〈社会系〉事後

生徒 a 国の課題をどのように解決していくかという考え方が前よりも身についたと思う。プレゼンテーションの構成の仕方を学んだ。

生徒 b 大きく2つ身についたと思う。1つは情報集積力である。インターネットや文献から得られる情報は玉石混交、真偽のわからないものも多々あるが、この1年で取捨選択ができるようになったと思う。英語力も上昇したと思う。

〈英語系〉年度初め

生徒 c 英語で自分の考えていることをうまく伝えること。あまり東南アジアの状況を深く知っていないこと。

生徒 d 高校生にできる限度があるのでそこのバランスが難しい。深い問題についてできたら立派だけど大変そう。

〈英語系〉事後

生徒 c 実際その内容がどうであれ、問題解決に向けての改善案を考えることができた。また留学生と英語でコミュニケーションをとることで、少し英語で話すことへの抵抗がなくなったがまだまだ英語力が足りないと実感することだけであった。そしていつかミャンマーへ旅行に行きたい。

生徒 d これまでは答えのある問題を解くことが多かったが、1年間答えのない問題にじっくり向かい合ってきて、難しさに気付いた。そんな中でグループみんなでやるとなかなか進まなかったが、やらなくてもいいことを進んでするという大切さを学ばされた。

(理科系) 年度初め

生徒 e レポートなどをまとめる力がない。(使用するかはともかく) 英語があまり話せない。

生徒 f 圧倒的に知識が足りないのが特に課題だと思う。だから建築についての知識をもっと取り入れたいと思う。

(理科系) 事後

生徒 e 思い切った行動 (作者に連絡を取るなど) ができるようになった。英語を使う抵抗が減った。

生徒 f 研究をするときに前回の発表で論理的に弱い部分を見逃されずに指摘されたので、筋の通った発表内容にしようと努力した。最初は慣れなかったので大変だったが最終発表のときには論理的に考える力を身につけられたのでよかった。

### ③課題研究 SGH 関連講座中間発表時と最終発表時におけるルーブリックによる評価

課題設定力、研究基礎力、研究展開力、表現力、応答力の5つの観点7つの項目からなる評価シート(別掲)を作成し、あらかじめ生徒に提示した上で発表会当日に指導助言者による評価を行った。また、運営指導委員からは講評をいただいた。中間発表時の評価・講評を通して、研究手法や発表技法等に対する生徒自身の理解が深まり、改善が見られた。今年度は最終発表では、SGH 関連講座は複数の会場に分散して口頭発表を行ったため、全ての運営指導委員、指導助言者から評価を得ることができなかった。従って、SGH 関連講座の生徒は全ての発表が終わった後、六稜会館3階ホールに集合し、それぞれの系列の発表を見てくださった運営指導委員や指導助言者の先生方から講評をいただいた。先生方によるルーブリック表は当該のグループに手渡し、振り返りの材料とした。

参考に、今年度と同じルーブリックを用いて評価をした昨年度のSGH 関連講座と比較すると、上位3グループの平均点は以下の通りであり、ポイントの上昇が見られる。

平成29年度 1位 19.7 2位 19.3 3位 19.2

平成30年度 1位 22.5 2位 19.5 3位 19.3

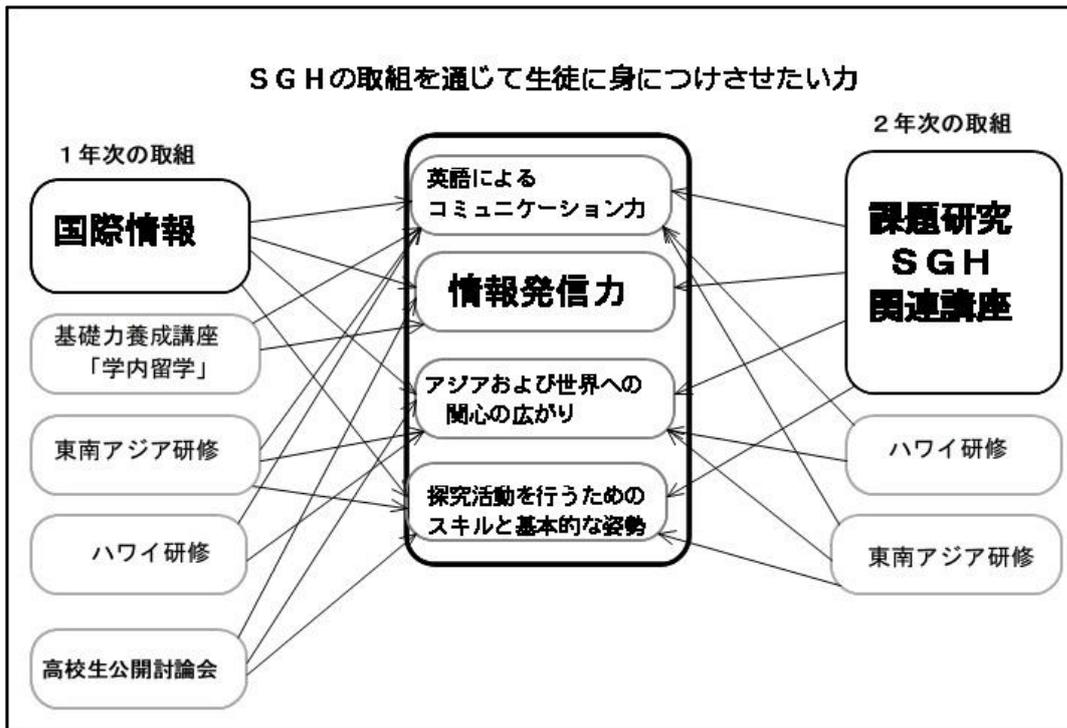
### (2) 中間評価において指摘を受けた事項についての改善・対応状況

#### ①「生徒の伸長に係る研究成果の検証に関して、調査に基づく分析が不十分」

前項(1)①～③の指標による調査・分析による検証を継続・改良して行った。課題研究 SGH 関連講座の受講生に対するアンケートは、今年度は2回に変更し、生徒の変容をより客観的にとらえることをめざした。運営指導委員等からの助言も要旨を記録して生徒や教職員に還元している。

#### ②「それぞれの取組の連携が不十分」

構想調書で研究開発を行う上で課題と位置づけた3点(「英語によるコミュニケーション力」、「情報発信力」、「アジアおよび世界への関心の広がり」と日本についての再認識)に加え、SSH 指定以来、本校で取り組んでいる「探究活動を行うためのスキルと基本的な姿勢」を「取組を通じて生徒に身につけさせたい力」と想定し、各取組の連携を下図のように位置づけた。



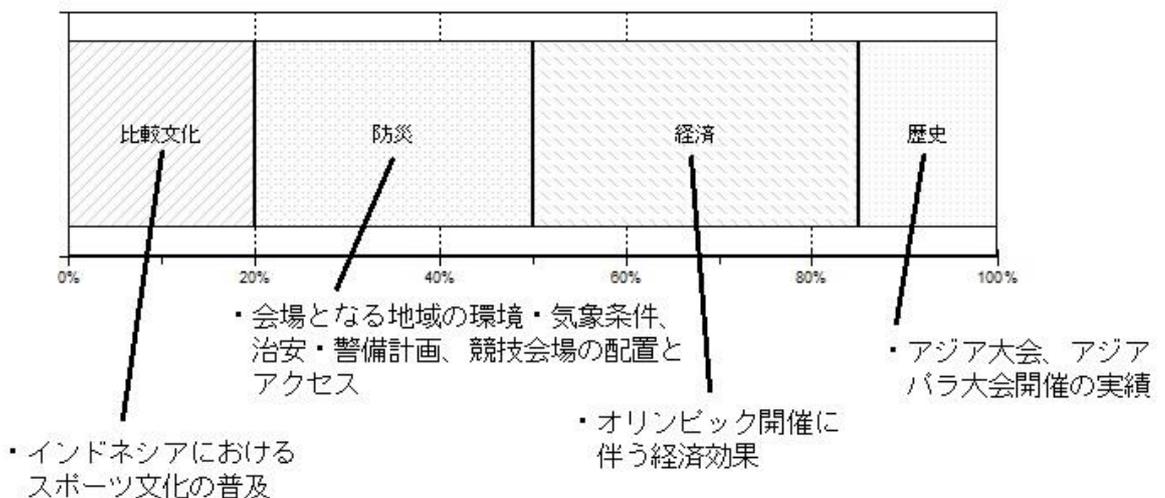
③「4つのアプローチが実施されていないようである。」

情報収集および分析の手法として、比較文化、防災（広義には貧困層の生活基盤・セーフティネットも含む）、経済（ビジネス）、歴史という4つの観点のいずれか、またはそれらを複合した視点に着目するよう各グループに指導してきた。その結果、4つの観点が截然と区別されるわけではなく、担当教員の専門分野によりアプローチの比重がグラデーションを描くことが分かった。

今年度の課題研究においても同様の傾向が見られる。参考までに社会系と英語系の例を示す。

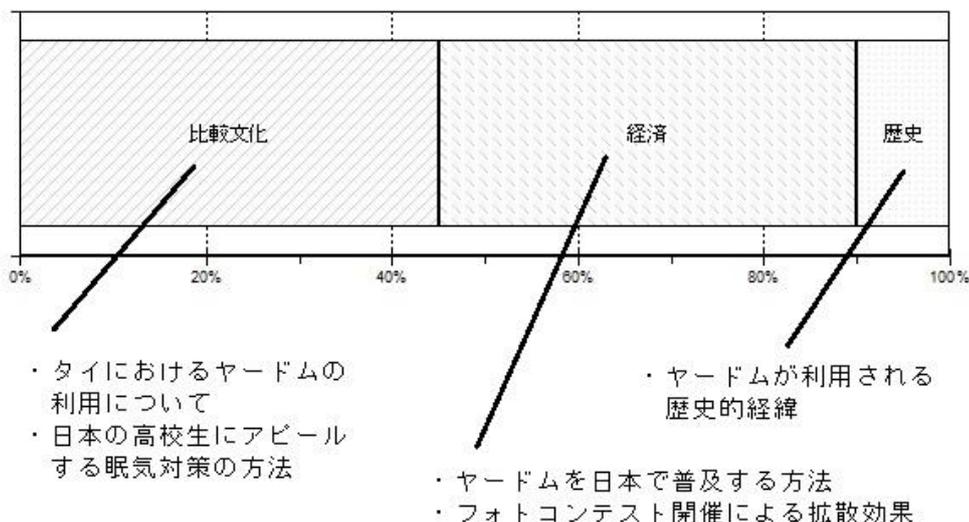
**社会系**

**インドネシアで五輪開催を**



## 英語系

### Stop Ourselves Sleeping ~What we learned from an inhaler in Thailand, YADOM~



なお、理系講座（橋梁など）は防災面からのアプローチに重点的に取り組んでいる。

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

本校は平成 26 年度に SGH の指定を受けた。一方で本校も含めた大阪府立高校 10 校は平成 23 年度入学生より文理学科が設置された（グローバル・リーダーズ・ハイスクール GLHS）。本校でも新学科設置に対応するため、理数、英語、特別研究などの学校設定科目を設けた。文理学科の生徒が 1 年次で履修する国際情報や 2 年次において行う課題研究は、この特別研究の中の科目として位置づけられた。

SGH の指定を受けた後も、教科・科目の大幅な改変をすることなくカリキュラムを構築することが模索された。その結果、平成 14 年度から指定を受けていた SSH のカリキュラムのひとつとして新規に設けられ、指定終了後も SS コースの生徒が履修してきた 2 年次における課題研究の中に SGH 関連講座を開設することにした。

SGH の取組を構築するにあたって、北野高校の卒業生（102 期生）である京都大学東南アジア研究所准教授（当時）である岡本正明氏に指導助言をお願いした。その経緯もあり、北野高校 SGH のテーマは、「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」に確定した。また、指定年度に入学してきた 129 期生に対しては、国際情報の中で情報科以外の教員との T.T. の形式をとりながら英語文献の購読やプレゼンテーション、理科の実験・観察などの授業実践を行った。

また、近年では英語における 4 技能が重視される新学習指導要領の実施を念頭に置いて、スピーキングやプレゼンテーションなどの活動を重視した授業展開が行われるようになった。

### (2) 高大接続の状況について

当初の構想では、海外の大学への進学者数の増加が目標として挙げられていたが、指定最終年度現在、達成されているとは言いがたい。これまでの本校の取組を継続しつつ、海外の教育・研究機関に対する生徒の関心を高めていくことがこれからの課題として挙げられる。

大学の単位履修制度の設置の有無に関しては、平成13年度から大阪大学との連携が始まり、大阪大学において主に1回生を対象として開講される「基礎セミナー」の講座を公開講座（高校生を対象とした授業公開）として設定し、本校の2年生が本校での授業を終えてから受講するという形態で始まった。この受講は、本校の特別研究に含まれる科目として単位が認定されるシステムであった。しかし、残念ながらこの制度は今年度で終了した。

### (3) 生徒の変化について

本報告書の7(1)①で紹介した関西学院大学によるアンケート調査は、本校のSGH指定以来継続して行われている。ただし、初年度（平成26年度）は、SGH講座を選択した生徒のみ41人を対象に実施された。年度によって設問が微妙に異なる項目もあるが、類似の設問項目ごとにSGH群の生徒の回答から6件法を数値化した平均値の推移を表したのが次頁の表である。

#### 関学によるアンケートの分析（SGH対象生徒のみ比較）

| 質問項目 |                                     | 128期 | 129期 | 130期 | 131期 | 132期 |
|------|-------------------------------------|------|------|------|------|------|
| Q1   | (日本以外の)先進国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたい。 | 4.29 | 4.06 | 3.95 | 4.06 | 4.26 |
| Q2   | 日本のことをもっと知る必要があると思う。                | 4.93 | 4.61 | 5.00 | 4.42 | 4.52 |
| Q3   | 地球規模で社会に貢献したい。                      | 3.83 | 3.69 | 4.63 | 3.70 | 4.20 |
| Q4   | 日本のことを他国の人もっと知ってほしい。                | 4.44 | 4.12 | 4.11 | 3.90 | 3.94 |
| Q5   | 開発途上の経済発展に貢献したい                     | 3.61 | 3.43 | 5.15 | 3.33 | 3.80 |
| Q6   | 海外支援活動に参加したい。                       |      |      | 3.55 | 2.95 | 3.65 |
| Q7   | 海外で、いろいろなことにチャレンジしたい。               | 4.54 | 4.57 | 3.73 | 4.14 | 4.90 |
| Q8   | 開発途上国の人たちと個人的に交流したい。                | 3.88 | 3.33 | 4.63 | 3.09 | 3.58 |
| Q9   | 英語によるコミュニケーション力を高めたい。               | 5.59 | 5.22 | 3.50 | 5.20 | 5.39 |
| Q10  | (日本以外の)先進国の人たちと個人的に交流したい。           | 4.20 | 4.02 | 5.35 | 4.07 | 4.45 |
| Q11  | 現在起こっている世界の出来事の背景や歴史について学ぼうと思う。     |      |      | 4.40 | 3.90 | 4.14 |
| Q12  | 環境問題の解決に貢献したい。                      | 4.07 | 3.55 | 4.10 | 3.94 | 3.70 |
| Q13  | 開発途上国の文化や風土や政治経済の現状などについて知りたい。      | 3.93 | 3.76 | 3.78 | 3.62 | 3.82 |
| Q14  | 国際的な展開をしている企業で働きたい。                 |      |      | 3.48 | 3.79 | 4.49 |
| Q15  | 国連や国際NGOなどの国際的機関で働きたい。              |      |      | 3.73 | 2.64 | 2.99 |

数値の大きな上昇が見られた項目を着色した。指定最終年度の2年生である132期生は、海外での活動について高い関心を示す傾向が見られる。

#### (4) 教師の変化について

指定初年度より、課題研究SGH関連講座や国際情報等を担当する教員を中心にSGH委員会を組織し、運営を担ってきた。年度の進行とともに、特に平成28年度入学の131期生からは学年の生徒全てが文理学科になったこともあり、SGH関連講座を受講する生徒数が増加した。それに伴ってSGHの事業に関与する教員数も増加した。例えば課題研究のSGH関連講座では、初年度は社会（地歴公民）科の教員のみが担当していたが、次年度からは英語科および理科の教員も講座を担当するようになった。

また、学年の生徒全てが文理学科になった学年からは、課題研究の全ての発表会を1日で行うようになり、2年学年メンバーを中心にほぼ全員の教職員が運営に関与するようになった。

#### (5) 学校における他の要素の変化について

授業については、先にも述べたように英語科において4技能を重視した授業展開の工夫がなされてきたこと、国際情報の授業に情報科以外の教科の教員が参画していること、課題研究SGH関連講座を担当する教員の範囲が広がってきたことなどが挙げられる。今年度については大阪教育大学連合教職大学院の院生が社会系グループのサポートに入っている。また、初年度に関西学院大学の協力を得て、課題研究において海外からの留学生や海外滞在経験のある大学院生・学部生を招致したワークショップを開催した。この取組は学生・本校の生徒双方にとって有意義であるという共通認識が本校教員の中で生まれ、以後の年度においても継続して行われている。

課題研究の発表会は保護者にも案内している。初年度から今年度まで、最終発表会を参観した保護者数は以下のとおりであった。

H26年度：194名、H27年度：141名、H28年度：86名、  
H29年度：91名、H30年度：142名

また、大阪府の公立高校入試では、平成29年度入学生から出願の際に自己申告書の提出を求められるようになった。本校に出願する際に、自己申告書に「SGHの取組に関心がある」、「自分も(SGHの活動に)取り組んでみたい」旨を記載した受験生が見られる点も、SGH普及の成果の一端であると言える。

#### (6) 課題や問題点

中間評価において指摘された、改善が必要な点については、6(2)に記載したとおり、本校の全ての教職員が課題1から課題4を念頭に置いて実践を行っているところである。また昨年度からは、文部科学省による指定が終了した後の取組即ち後継事業に関しても校内で議論をすすめてきた。特に後継の取組において北野高校が掲げるテーマについては、教職員の間からさまざまな意見が出された。SGH事業立ち上げの際の経過があるとはいうものの、「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」という大テーマを設定したことにより、課題研究において探究活動のフィールドが限定されてしまったという指摘もなされた。現段階では、次年度以後の取組を本校の幅広い範囲の教職員によって担うことが可能になるよう、なるべく広汎で包括的な大テーマを設定することが望ましいという結論に至っている。

(7) 今後の持続可能性について

北野高校がこれまで培ってきた教育に関する先進的な取組は、平成26年度にSGHの指定を受け、カリキュラムの研究開発を行ってきたことによって新しい側面をアピールすることができたと考えている。これまでの取組のメリットを次年度以後に入学してくる生徒たちも最大限に享受できるよう、設置者である大阪府教育委員会と連携しながら引き続き模索していきたい。

【担当者】

|     |            |        |                                   |
|-----|------------|--------|-----------------------------------|
| 担当課 | 教育振興室高等学校課 | TEL    | 06-6944-7093                      |
| 氏名  | 松下 信之      | FAX    | 06-6944-6888                      |
| 職名  | 主任指導主事     | e-mail | MatsushitaN@mbox.pref.osaka.lg.jp |